

氏名 村元 彩夏
ヨミガナ ムラモト アヤカ
学位の種類 博士（音楽）
学位記番号 博音第258号
学位授与年月日 平成27年3月25日
学位論文等題目 <論文> ロベルト・シューマン《メアリー・ステュアート女王の詩による5つの歌》作品135 —創造的な歌唱表現のためのドラマトゥルギー—
<演奏> 《ミルテの花》作品25 Myrten Op.25 より
1. 献呈 Widmung
4. ある人 Jemand
9. ブライカの歌 Lied der Suleika
10. ハイランドの未亡人 Die Hochländer Witwe
15. ヘブライの歌から Aus der Hebräischen Gesängen
16. なぞなぞ Rätsel
17. ヴェネツィアの歌1 Zwei Venetianische Lieder 1
18. ヴェネツィアの歌2 Zwei Venetianische Lieder 2
21. 孤独な涙 Was will die einsame Träne
22. 誰にも Niemand
25. 東方のバラより Aus den östlichen Rosen
26. 終わりに Zum Schluß
《ゲーテ「ヴィルヘルム・マイスター」によるリートと歌》作品98aより
Lieder und Gesänge aufs “Willhelm Meister” Op.98a
1. ご存知ですか、あの国を Kennst du das Land
2. ただ憧れを知る人だけにのみ Nur wer die Sehnsucht kennt
5. 語れとなど命じないで Heiß mich nicht reden
7. 悲しい歌はおやめなさい Singet nicht in Trauertönen
9. このままの姿でいさせてください So laßt mich scheinen
《メアリー・ステュアート女王の詩による5つの歌》作品135
Gedichte der Königin Maria Stuart Op.135
1. フランスとの別れ Abschied von Frankreich
2. 王子誕生ののち Nach der Geburt ihres Sohnes
3. エリザベス女王に An die Königin Elisabeth
4. この世との別れ Abschied von der Welt
5. 祈り Gebet
《レーナウによる6つの詩とレクイエム》作品90より
Gedichte von N.Lenau und Requiem Op.90
7. レクイエム Requiem

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	寺谷 千枝子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	佐々木 典子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	檜山 哲彦
(副査)	東京藝術大学	名誉教授		伊原 直子

(論文内容の要旨)

ロベルト・シューマン Robert Schumann (1810-1856) の遺した最後の独唱歌曲集《メアリー・ステュアート女王の詩による5つの歌 Gedichte der Königin Maria Stuart》作品135は、波乱の生涯ののちに処刑されたスコットランド女王メアリー・ステュアート Maria Stuart (1542-1587) を描いた作品である。シューマンの後期作品を代表する極めて味わい深い作品だが、演奏機会はあまり多くなく、その知名度から言ってもこの作品の真価が私たちに浸透しているとは言え難い。歌詞は一貫してメアリー側の視点に立っており、本人が語る口調で、その人生において最も過酷な5つの場面が描かれている。非常に断片的に描かれるこの5つの場面に、時間軸上の連続性(生涯)をもたらすことはできるのだろうか?という疑問が浮かんだ。また、演技や舞台装置、衣装などを伴わない歌曲演奏において、演奏者はどのように主人公メアリーを表現できるだろうか、という課題が見えた。本論文は、演劇的要素を大いに含むこの課題を、歌唱表現によって実現していくための一考察である。

第1章では、メアリー・ステュアートの生涯を本歌曲集の第1曲から第5曲に対応させながら辿った。その結果、場面設定が明確となり、歌曲集で描かれる5つの場面がメアリーの人生において「一本の線上にある5つの点」であることを確認した。また、容姿・好み・性格などの人柄を表わす側面の他、メアリーの人生において多大な影響力を及ぼしたエリザベス1世との比較を行うことで、より人間的なメアリー像の形成を試みた。これらの考察は具体的なイメージを膨らませるために大変有意義だった。

第2章では、2011年に発表された Jon W. フィンソン氏の専攻研究を主な参考資料とし、本歌曲集の詩の出処について調べた。その結果、それぞれの詩の出処が明らかになり、全5曲中3曲がメアリー自身の詩ではない事が判明した。またシューマンについては、本歌曲集を作曲したデュッセルドルフ時代にあたる1852年に焦点をあてた。体調の悪化により精神的にも肉体的にも疲れ果て、仕事も思いどおりに進まない状況の中で本歌曲集が作曲されたことが分かった。

第3章では、ドラマトゥルギーの観点から、創造的な歌唱表現の実践方法を探求した。まずドラマトゥルギーの構築には、メアリーの綿密な心理描写と、シューマンの描いた音楽から手がかりを得た。具体的なアプローチ方法や筆者の抱えるテクニク的な問題の改善方法を探求しながら考察を進めていくうちに、ドラマトゥルギーを構築していく作業と歌唱表現を探求していく作業は直結しており、どちらにも共感によって得ることのできるリアリティが必要不可欠であることを実感した。こうした積み重ねで全体像を得ると、5つの断片的な場面は逆説的に強い結びつきを持ち、近視眼的に捉えていた段階では得られない視点を得る結果となった。

以上のことから、ドラマトゥルギーを意識することは、演奏に豊かな表現の可能性を見出し、意志を伴った方向性をもたらすことができるのではないかと感じた。こういった意識は、歌曲演奏において特に求められているのではないだろうか。本論文は、演奏者が歌手手であり、演出家であることを再認識するための一考察となり、解釈・演奏法を改めて示唆するものとなった。

(総合審査結果の要旨)

R. シューマン《メアリー・ステュアート女王の詩による5つの歌》作品135—

創造的な歌唱表現のためのドラマトゥルギー—と題した本論文は、R・シューマンの最後の歌曲集であるスコットランド女王メアリー・ステュアートの5つの断片を、一人の人物の一生を表現するドラマ性のある歌唱とは何かを焦点を合わせ、その劇的な生涯、歴史や時代背景、詩の成立から作曲成立状況などを追求し、最終的に実践に向けての具体的な演奏論に発展させた。

視点が凝縮されたことにより逆に視野が広がってゆき、メアリー・ステュアートの絶望がシューマンの絶望と重なり、5曲目の「祈り」で自己救済に繋がるようにも思えた。

題名の「ドラマトゥルギー—」という言葉の設定についての疑問がのこるものの、丁寧な分析と研究に基づき滑らかな読みやすい文体による「メアリー・ステュアートの5つの歌」案内人としての秀逸な論文として評

価された。

学位審査演奏会は2月19日第6ホールに於いて、R・シューマンの作品から、1840年「歌の年」に作曲された「ミルテの花」から12曲、後期に入りゲーテの「ヴィルヘルム・マイスター」からミニョンを中心に5曲、論文のテーマである「メアリー・ステュアート女王の詩による5つの歌」、そしてその死を悼むかのようにOp. 90の「レクイエム」で結ばれた。

「ミルテの花」は多彩な12曲をさまざまな色合いで表情豊かに細やかに歌い分けられた。「ヴィルヘルム・マイスター」ではミニョンの思いが切々と丁寧に描かれ、「メアリー・ステュアート」では論文研究を軸として、淡々と抑揚の少ない作品にもかかわらず、深さと表現力で非常に完成度の高い演奏になった。

全体を通して柔らかく滑らかなドイツ語により詩のひとつひとつの言葉やフレーズが美しく語られた。

響きの位置の為か音楽のフレーズの最後に力が失われる箇所が時折見受けられたのが今後の課題として残るが、感性豊かで魅力的なシューマン演奏として高く評価された。

以上をもって論文、演奏共に博士学位に値すると判断し「合格」とする。